

---

# サモンナイト小説 第3弾～記憶編～

雨音結花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サモンナイト小説 第3弾〈記憶編〉

### 【Nコード】

N8012J

### 【作者名】

雨音結花

### 【あらすじ】

サモンナイトシリーズから派生した番外編ストーリーです。

## 第1話「鬼妖界に召喚された記憶喪失の若者」

これは数日前の出来事である。

ある男が鬼妖界に召喚された、

彼は、自分の名前はおろか、自分が誰なのかでさえも忘れてしまっていた。

その時、声がした。

「君は、いったいここで何をしてるの？」

その声は言った。

「僕かい？僕は誰かによって名も無き世界から召喚されたんです。自分が誰なのかでさえも憶えていないんだ。思い出せないんだ、なにもかも。僕に声をかけてくれている君は誰だい？」

「私は、あなたをつれて来なさい、と言われた者です。さあ、こちらへどうぞ」

彼は少女に導かれて、鬼妖界へと入っていった。

建物の中に案内され、入るとそこには老人がいた。

老人「よく来たな。実はおぬしを召喚したのはこのリインバウムを救って欲しいからなのじゃ」

若者「リインバウムを救うというのはどういうことでしょうか？」

老人「まずはわしの話を聞くのじゃ。おぬしは召喚されたがゆえに、救うだけの力がない。しかし、今からその力をつけさせてもらうしか方法がない。そもそもこうなった原因は…」

老人は話を進めた。

かつてこの島には、何人ものの守り主と呼ばれる、護人もりびとがいたのだ  
そうだ。

外界からやってきた者も、楽園と呼ばれたこの島を守ってきたとい  
う。

しかし、抜剣者（Ⅱセイバー）は自殺したのだという。

そのせいか、亡霊たちを抑えられず今の段階になったのだという。

老人「おぬしは、今日からリュウと名乗れ。私の娘を護衛獣として  
旅立ってもらう。全ての目標は、ラインバウムの復興と共に！」

イマリ「：今日からよろしくお願いしますね。ご主人様。私はイマ  
リと言います」

リュウ「イマリ、今日から宜しくな」

キャスト

リュウ…柿原徹也

イマリ…平田真菜

イマリの父…麦人

## 第2話「竜眼鉱を守る者」

リュウ「…とりあえず、君の父親はどこへ向かえて言っていたっけ？」

イマリ「…北ですね。そこに洞窟があるはずですよ」

リュウはイマリと共に、北へ目指した。  
するとすぐに洞窟は見つかり、二人は中へ。

リュウ「ずいぶんと暗いな…」

イマリ「…そうですね。でもここでへばっているのはダメですよ、ご主人様」

リュウ「そうだな。イマリの言う通りだ」

そんなこんなで、話をしながら二人は奥へと進んでいった。  
しばらく進むと、目の前に目的の物があった。

リュウ「あった！あれだ！」

イマリ「そうですね、でも…」

目的の物の前にはボスが待ち構えていた。

ボス「お前が新しく召喚された者か？ちょうどいい、退屈していたところだ」

リュウ「来るなら、来い！」

ボス「ふっ、せいぜいあがくがよい」

ボスが繰り出してくる攻撃に対し、イマリはリュウをアシストする。

ボス「なんだと？攻撃をはじかれただど？」

そうやって、ボスと何度か対峙した。

そして目的の物を入手すると、声が聞こえた。

声「お前があゝの魔物を打ち破ったのですね？」

リュウ「はい」

声「この竜眼鉱は、これからの旅でなくてはならないものです。もしもの事があったら、いつでも使いなさい」  
リュウ「はい」

キャスト

リュウ…柿原徹也

イマリ…平田真菜

ボス…安元洋貴

声…内田彩

### 第3話

その夜。二人は元の場所に戻った。

老人「疲れただろう？今日はゆっくり休むが良からう」

二人が横になった後、声がした。

声「お前は人間ではありませんね？この石がとれなかったのはおそらくあの魔物がいたからでしょう」

老人の正体は鬼だった。

リュウ「イマリの父が鬼…？ばかな、人間だったはず…」

声「リュウ。こやつは鬼でありながら、人間のふりをしてお前を呼んだのです」

リュウ「どうして？」

声「それは私にもわかりません。しかし、この石を入手して大いなる力を入手しようとしたのは紛れもない事実です」

イマリ「そんな…お父様が…？」

鬼「さあ、来い！我が娘よ。その者を殺せ！」

イマリ「…はい、お父様…」

リュウ「助けてくれ…！」

イマリ「申し訳ありません、ご主人様…！でも身体が勝手に…」

声「…おい、起きろ！」

???「…？」

声「やっと起きたのね。学校に遅刻するわよ！」

学校…？遅刻…？この人は何を言っているのだろうか？  
だって僕はリンバウムへ行ったはず…。なのになぜ？

声「お兄ちゃん、ほら朝ご飯。食べないと力出ないよ」

お兄ちゃん…？一体ここは…？  
僕は一体何がどうなって？

声「もう、本当に寝ぼけてるんだから…」

女「祐介…、しっかりしなさいよ、今日からあんた大学生じゃないか…」

祐介？それが僕の名前なのか？

女「まあ、あの事故があったあとだもの。記憶がないのかもしれないわね」

記憶…？だんだん分かってきた。

僕の名前は祐介あまち ゆうすけというらしい。  
天地祐介という名前らしい。



今年の4月から大学生になるんだった。

そしてあれは夢だったのか、今はよく分からない。

大学では友達ができた。これは嬉しいことだった。  
でも…

夜珍しく、尚美という僕の妹が部屋に入ってきた。

尚美「お兄ちゃん、お疲れ様」

祐介「ありがとな」

尚美「いいよ、別に。今日のお兄ちゃん、すごく変だよ?」

祐介「そんなことないよ。いつもと同じだよ」

尚美「でも…、本当はお兄ちゃん…」

祐介「えっ?」

尚美「もう死んじゃったんだよ…」

祐介「!?!」

尚美「本当は、あの時お兄ちゃんの肉体は亡くなっちゃったんだ。  
でも悲しくて…。ここにいますお兄ちゃんは今、魂だけなの。そして  
向こうでもお兄ちゃんは死んだ…」

祐介「尚美…、なぜお前がそれを知ってる!?!」

尚美「だって…、私は…!ご主人様の…」

祐介「まさか…!いいや、しかし!そうとしか!お前…、イマリか  
?」

その瞬間、闇だけが残った。

もう僕にはなにもなくなった…。

僕は大学生になった時、歩道を歩いていたところ、突然バイクが突  
っ込んできて…。

その事故で僕は救急車で運ばれて…、死亡した。  
召喚されたのだ、あれは現実だったのだ。

キャスト

リュウ…柿原徹也

天地祐介…柿原徹也

イマリ…平田真菜

天地尚美…平田真菜

鬼…松原大典

祐介の父…松本保典

祐介の母…牧島有希

声…内田彩

## 第4話

鬼「これでこの石はもう私のものだ」

竜眼鉾を手にして、イマリに近寄ってきた。

イマリ「お父様…、私はついていけません！」

鬼「何だと…！？そうか。ならばあの者と一緒の所へ連れて行つてやろう」

???「そうはいかないね」

イマリ「…どうして？私が殺したはず…？」

鬼「イマリの攻撃をくらっておいて、まだ立てる力があるのか」

リュウ「イマリ、僕は君のご主人様だから、さ」

鬼「今のお前では私には勝てん。その違いを教えてやる！」

リュウ「それはどうかな？来い、僕の剣！」  
けん

鬼「まさか…その剣は…」

リュウ「くらえっ！」

鬼「…バカな、私の力が…」

リュウ「イマリ…」

イマリ「ご主人様…」

リュウ「イマリを縛っている者よ、我が声に応えよ！」

イマリ「ご主人様…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8012j/>

---

サモンナイト小説 第3弾～記憶編～

2010年12月31日19時37分発行